様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月　５日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2008　～　2012
課題番号：20520576
研究課題名（和文）
出土文字資料からみた古代天皇の家産制的手工業の研究
研究課題名（英文）
Study on Handicraft of Imperial Household from Excavated Written Sources
研究代表者
古尾谷　知浩（FURUOYA TOMOHIRO）
名古屋大学・文学研究科・教授
研究者番号：70280609

研究成果の概要（和文）：本研究は、技術史的観点を重視し、出土文字資料を活用して、日本古代の手工業について検討を行った。具体的には、土器、瓦、銅製品、鉄製品などを取り扱った。その結果、律令国家が掌握した手工業は、広範に展開した手工業のうちの一部に過ぎないこと、国家による手工業管理においては、天皇や皇貴族の家産機構が重要な役割を果たしていたことなどを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In this study, I examine the handicraft of Japanese ancient times in the viewpoint of the history of technique, utilizing excavated written sources.　Specifically, potteries, roof tiles, and bronze and iron implements etc. were dealt with. As a result, I clarified that the ritsuryo state held only the part of handicraft developed extensively and that household of Emperor and aristocrats is important in the handicraft management by the state.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
総　計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：日本史学
科研費の分科・細目：史学・日本史学
キーワード：古代史、天皇、家産制、手工業、出土文字資料

１．研究開始当初の背景

従来の、日本古代手工業史に関する文献史学的研究では、ものを作った主体である人間の編成、統括する官司、ひいては国家や権力との関係についての研究は著しいものの、作られた客体である物質資料自体や、それを生産した技術についての関心は乏しいか、古い段階の考古学の蓄積しか反映されていないとみることができる。

一方、考古学研究では、これと逆に生産遺跡や消費地の遺跡における資料の研究に基づき、物質資料の生産・流通や技術に関する研究が著しいのに対し、生産した人間の編成や、

これを管理・支配する権力との関係についての検討は進んでいないのが現状である。

２．研究の目的

こうした状況に対して研究を先に進めるためには、文献史学と考古学の総合が不可欠である。本研究では、文献史学の立場からこれを総合する具体的な方法として、次の３つの視点から手工業史を捉え直すことを目的とした。

(1)文献史学に手薄な技術史的な検討の側面では、物質資料の検討から復元される技術史的要素を加味して文献史料を再検討すること。

(2)物質資料自体に記された文字資料や出土した物質資料と伴出した文字資料などから生産現場のあり方を復元的に検討する。

(3)文献史学がこれまでに重視してきた国家との関係を検討する側面においては、天皇の家産制的な部分に着目しながら再検討すること。

３．研究の方法

前記目的の達成のため、主たる検討対象とする手工業の分野を①土器②瓦③金属器（銅・鉄）の３つに設定して検討を進めた。研究の方法としては、ａ手工業生産・流通・消費に関わる文献史料の調査、ｂ各分野についての考古学・文献史学の先行研究の整理、ｃ出土文字資料などとして得られる、手工業生産物自体に記された文字の調査、及び手工業生産物と伴出する出土文字資料の調査の３つを主要な作業とした。

４．研究成果

本研究の成果は、後掲著書および著書以降に刊行された論文にて公表しているので、まずその概要を述べる。

(1)『文献史料・物質資料と古代史研究』（塙書房、二〇一〇年一二月）

序章　文献史料と物質資料

杉原荘介『原史学序論』（慶文館、一九五三年）に依りながら、文献史料を歴史的営為の主体である人間の側を明らかにするもの、物質資料を、営為の客体の側を明らかにするものと位置づけ、モノに書かれた文字や、モノの生産の問題を扱うという、本書の課題を示した。

第一部　出土文字資料－モノに書かれた文字

第一章　出土文字資料研究の方法

金石文・墨書（刻書・篦書）土器・文字瓦などについて、文字が記された素材の観点と、モノの製作・流通・保管・使用・廃棄の過程という観点を軸に、出土文字資料を取り扱う際の方法を検討した。

第二章　木簡研究の方法

木簡の研究史を踏まえ、文書木簡・荷札木簡などの分類に従って、木簡研究の方法を検討した。

第三章　祢布ヶ森遺跡出土の題籤軸

掘立柱建物の柱穴に廃棄された題籤軸について、そのライフサイクルを検討し、軸に巻かれていた文書が不用になった後、反古紙として二次利用され尽くした後で、軸のみが廃棄されたと推定した。

第二部　古代の手工業－文献史料からみたモノの生産

第一章　古代の鋳銅

鋳銅関係官司の変遷、印の製作、鏡の製作、仏塔の露盤の製作、小金銅仏の製作などの問題を取り上げ、律令国家は鋳銅技術を独占しようとはしていなかったこと、国家が技術者や原材料などを掌握していた局面は、天皇の家産機構が中心で、皇貴族家産機構とこれらを緩やかに共有していたことを論じた。

第二章　平安時代の梵鐘生産

一〇世紀～一一世紀の梵鐘生産について、発注者である寺院や貴族層は、発願の意志、鋳造日程などについて鋳物師に指示をして製作させていた点で、工人側を管理していたが、寺院や貴族と鋳物師は排他的な支配従属関係にあったのではなく、奈良時代と比較すると工人の自立が認められることを論じた。

第三章　律令制下における土器の生産と流通

都城を中心として、須恵器・土師器などの生産と流通の問題を扱った。須恵器は調およびこれと連動した交易による調達が主流であったこと、土師器の畿内調としての貢納や、須恵器・土師器の官による直接生産も行われていたが、これは天皇やこれに準ずる者の家産機構における供御や祭儀における使用に限られ、一般的なあり方ではなかったこと、都城における一般的な須恵器、土師器調達のあり方は銭貨による購入であったことなどを論じた。

第四章　焼成前刻書土器再論

須恵器の生産段階で記された篦書文字について、調納、天皇家産機構による生産、交易などの観点から分析した。

第五章　杯蓋硯考

文献史料にみえる「杯蓋硯」について、これが一度も食器として使われずに硯として使用されたことを論じ、「転用」の概念を再検討した。

第六章　文字瓦と知識

従来、律令制的負担体系に基づく徴収を示すものか、知識による納入を示すものかで議論があった東国国分寺の文字瓦について、律令的行政機構を単位として賦課された知識の負担を示すものとして、議論を止揚しようとした。また、比較的純粋に知識による納入を示すと考えられてきた大野寺土塔の文字瓦についても、知識集団の自己認識の単位は律令制的行政単位であったことを論じた。

第七章　奈良時代における瓦窯と供給先寺院の関係

東大寺、法華寺に用いられた瓦を供給した瓦窯と、寺院造営機構の関係について、発注・製作命令の伝達、労働力の確保、工程の管理、施設・原材料・燃料の調達管理、製品の供給などの観点から考察した。結論として、造東大寺司は瓦窯を管理し、瓦工の労働の詳細を掌握していたのに対し、法華寺造営機構は瓦窯を管理せず、瓦を外注して、延べ労働力に対価を支払って調達していたと論じた。

第八章　平安時代の瓦生産

主として一〇世紀半ばの興福寺再建、東大寺修理に伴う瓦の製作について検討した。寺院、造営機構側は、可能な限り瓦窯を管理し、瓦工の労働を掌握しようとしていたが、奈良時代ほどには詳細を把握できず、瓦窯をもたない寺院は交易により瓦を調達する場合もあったことを論じ、手工業生産を支配しようとする寺院と、自立を志向する瓦工との緊張関係が認められることを指摘した。

第九章　家産制的手工業の歴史的展開

古代の手工業について、造寺造仏技術の伝来により、部民制的手工業が解体し、奈良時代には天皇の家産制的官司を軸に技術労働者が編成されていったこと、平安時代には手工業が個別の皇貴族家産機構に分散し、手工業者が自立していく傾向はあるものの、大嘗祭の調度品製作、大神宝の製作などを契機に、天皇の下に手工業者が再編成されており、天皇の代替わりに際して天皇の求心力が更新されていたことを論じた。

第三部　近世・近代史料と古代史

第一章　延享四年開関解陣勅符写

名古屋大学文学部所蔵の真継家文書に含

まれる当該文書を分析し、近世において古代の史料が再現された事例を検討した。

第二章　延暦八年六月一五日勅旨所牒

小杉榲邨『徴古雑抄』により、当該史料が、明治初年には、東大寺の薬師院に、他の春日荘関係文書とともに所蔵されていたことを指摘した。

第三章　北浦定政「平城宮大内裏跡坪割之図」

当該史料の写本の系統を検討し、明治初年に江藤正澄、小杉榲邨らが北浦定政の平城京復原研究に注目していたことを指摘した。

終章　文献史学と考古学

史学史を踏まえ、文献史学と考古学の協業のためには、それぞれの研究対象を、それぞれの方法論で分析した上で、成果を照合することが重要であると指摘した。

⑵「文献史料からみた古代の鉄生産・流通と鉄製品の生産」（奈良文化財研究所編『官衙と鉄』クバプロ、二〇一一年一二月）

法制史料、正倉院文書、東大寺文書などにもとづき、奈良時代から平安時代中期に至るまでの、鉄鉱石・砂鉄の採取から原料鉄の生産、鍛造による農具・工具・武器などの生産、およびそれらの流通について検討した。

⑶「古代尾張国・参河国の手工業」（赤塚次郎編『尾張・三河の古墳と古代社会』、同成社、二〇一二年三月）

法制史料、正倉院文書、箆書土器などにもとづき、奈良時代から平安時代初頭に至るまでの、尾張・参河国における施釉陶器・須恵器・織物・兵器の生産と、その製品の流通について検討した。一般的な品については、民間に生産技術が存在し、製品は広範に流通しており、律令国家は租税、交易などの形でそれらを調達していたのに対し、高級品、祭儀用などの特殊品については、律令国家が主導して技術を移転し、原材料・生産施設などを直接管理して生産にあたっていたことを論じた。

⑷「国司と神宝」（『名古屋大学文学部研究論集』一七三、二〇一二年三月）

平安時代の諸国で行われた国司神拝に際して奉納された神宝の生産について検討した。京で調達された神宝と、受領が任国に到着した後に国内の工人に命じて生産された神宝をあわせて奉納していることを指摘し、このことから、国司による任国内の手工業に対する組織化、支配の問題や、中央から地方への技術移転の問題を論じた。

以上の通り、全体として、個別の手工業分野の研究を進めることができたと考えられるが、何のためにそれら種々の製品を作ったのか、という問題を考えることが次の課題として浮上してきた。今後は、その解決のために個別品目の研究を総合するものとして、寺院・官衙の造営総体を考察していきたいと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

①古尾谷知浩「古代尾張国・参河国の手工業」（赤塚次郎編『尾張・三河の古墳と古代社会』、同成社、査読無、2012 年、307 頁～325 頁）

②古尾谷知浩「国司と神宝」（『名古屋大学文学部研究論集』173、査読無、2012 年、225 頁～234 頁）

③古尾谷知浩「文献史料からみた古代の鉄生産・流通と鉄製品の生産」（奈良文化財研究所編『官衙と鉄』クバプロ、査読無、2011 年、167 頁～181 頁）

④古尾谷知浩「京と流通」(『季刊考古学』112号、査読無、2010年、63頁～66頁)
⑤古尾谷知浩「平安時代の瓦生産」(『古代文化』61巻1号、査読有、2009年、22頁～36頁)
⑥古尾谷知浩「平安時代の梵鐘生産」(『名古屋大学文学部研究論集』164号、査読有、2009年、1頁～9頁)
⑦古尾谷知浩「天皇家産制研究の課題」(『日本史研究』558号、査読有、2009年、28頁～36頁)
⑧古尾谷知浩「焼成前刻書土器再論－東海地域の事例を中心に」(『日本考古学協会 2008年度愛知大会研究発表資料集』、査読無し、2008年、639頁～642頁)

〔学会発表〕(計2件)
①古尾谷知浩「文献史料からみた古代の鉄生産・流通と鉄製品の生産」(第14回古代官衙・集落研究会、2010年12月11日、奈良文化財研究所(奈良県)
②古尾谷知浩「天皇家産制研究の課題」(日本史研究会、2008年10月12日、花園大学(京都府)

〔図書〕(計1件)
①古尾谷知浩『文献史料・物質資料と古代史研究』、塙書房、2010年、386頁

６．研究組織
(1)研究代表者
古尾谷　知浩(FURUOYA TOMOHIRO)
名古屋大学・文学研究科・教授
研究者番号：70280609

(2)研究分担者
無し

(3)連携研究者
無し